文部時報
文部省：編集
1990
平成2年
No.1363
8

特集

芸術文化政策の推進

巻頭言
真の文化国家を目指して——坂本朝一 6

座談会
芸術文化の振興——（出席者）遠山一行／永井多恵子／福原義春／（司会）渡辺通弘 8

論文
芸術活動と国際交流——丹羽正明 16
これからの日中美術——桑原住雄 20

施策紹介
関係者の念願がここに実現——文化庁長官官房総務課 24
表情のある国へ——堤 清二 26
「芸術文化振興基金」発足に思う——小泉 博 27
芸術文化振興基金に望むもの——細川護熙 28
どこを活力源とするか——渡辺浩子 29
助成事業の概要——日本芸術文化振興会基金部 30

体験記
現代の遣唐使——横井 茂 32
東京の、ある文化運動——糟谷道明 34

解説
文化政策国際会議報告——36

特別寄稿
文化財保護行政の歩み——柳田敏司 43

カラー
学校建築の今昔 城西小学校——1
人間国宝登場 六世宗家 藤間勘十郎——4
名作シリーズ 北野天神縁起——表紙2
文化財紹介 アジア航海図——表紙3

人・この道 阪田誠造——50
わがまちの教育・文化⑤ 清水市——51
ことばの小箱／やさしい教育用語の解説——54
私の選ぶ一冊——吉田 靖 55
焦点——文教施策——56
お知らせ——71
ふるさとのうた 五木の子もり歌——72

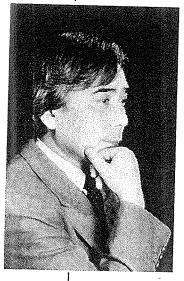
科学のひろば 宇宙科学研究所②——74
海外教育ニュース——76
郷土に生きる教育家群像⑰ 神奈川県——78
鑑賞席 西大寺展——82
読者からのたより——83
編集後記——84

イラスト　赤羽根秀一・内部敬生・須田博行

体験記

現代の遣唐使

大阪芸術大学教授
横井　茂



今年の海外旅行者は一〇〇〇万人を超えるという。外国に出かけることはそう難しいことではなくなったとはいえ、この数字にはやはり驚きを覚える。

昭和四二年、文部省文化局（現文化庁）派遣の芸術家在外研修員制度の第一期生として、私が欧米に旅立った際は、外国に行くのはまだ珍しく、日本から外貨の持ち出し枠も通常は五〇〇ドル、そして一ドルは三六〇円であった。その年の海外旅行者は二七万人弱。今日の四〇分の一である。外国はまだまだ遠くて高いところだったのである。

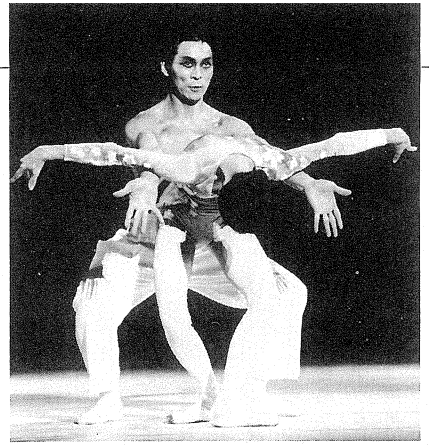
それだけに、「外国に行きませんか」と声をかけていただいた時には、長年抱いていた夢が一気に花開いた感じで、あの国へも、あの都市のあの劇場へもと、行きたい土地の名が次から次へと頭の中で駆け巡った。実際初めての海外の旅とはいえ、二三の国々をバレエとオペラを追いかけ歩き回ったのである。ニューヨーク、レニングラード、ウィーン、パリ等々。実に百数十回劇場に通ったことになる。夏冬の衣類等二〇kgの荷物を両手にさげ、今考えると誠に大変な旅であった。

文部省に以前から在研制度の構想はあったらしいが、私たち昭和四二年度第一期生への申し渡しは、「一週間以内に研修計画を提出してほしい」というほど急な話であった。ほかに指揮者の若杉弘さん、演出家の増見利清さん、洋画家の奥谷博さんが指名されていた。

私が研修に行った年は、世界が激動した年で、ニューヨークではドクター・キング殺害事件があり、パリでは五月革命の騒乱に出会い、ウィーンではロバート・ケネディの暗殺を知った。そしてバイロイトではソ連等のチェコ武力介入の報を聞いた。間もなくNATO軍の重戦車が街を横切って国境に向かうのを目撃、強い緊張を味わったチェコとの国境まで六〇kmの町での音楽祭も体験した。昨年から今年にかけてのチェコをはじめとする東欧の自由化への行動を見るとき、時代の大きな変化をしみじみ感じる。

海外に出たのは三八歳のときで、バレエの演出家としては一人まえであるとの自覚を持っていたが、外国での様々な舞台を見、稽古に立ち会ったこと、また、これら大きな世界的事件の続発には、やはり有形無形の影響を受けていたのである。

帰国後、私は原爆、沖縄戦、戦争犯罪等を創作の題材とし、また、『沈黙』『白炎』等日本人をテーマとする創作バレエを相次いで発表した。外国に行き、真に日本人は日本人でしかないことを知り、インターナショナルは



『風さそふ花』1985年　新井雅子　久光孝生
第26回東京バレエグループ公演

存在せず、無国籍の芸術は世界に無いことを知ったからである。

五二年度派遣のフレスコ画家の絹谷幸二さんは「私は研修に行って変な意味でなく愛国者になって帰ってきました」と語っていた。日本では得難いいろいろな体験が彼をかくのごとく語らせたのであるが、全く同感である。かつてブダペストで観たオペラ『青髭公の城』の演奏のすばらしさを同期の若杉さんは「おらが国の音楽なのだ」と解説してくれた。そして、ローマ国立劇場の舞踊監督ミロシュ氏は「〈白鳥の湖〉はあくまで白人のために創られた作品である」と語っていた。黄色人種の私たち日本人は、将来劇場芸術として何をもって世界に誇ることができ得るであろうか。

第二国立劇場の設立もまぢかになった今、日本人としてこれらの問題点は、真剣に考えるべきだ。劇場芸術家たちの悲願であった第二国立劇場では、欧米の古典作品の上演が多くなると考える。古典作品の上演は、技術の向上と海外に対する位置付けのため、必要欠くべからざることであるが、しかし、その後果たして日本として海外に誇れる劇場芸術が誕生するであろうか、私は強い懸念を覚える。やはり欧米の劇場芸術の発祥のごとく、古典作品の上演とともに、日本人の創作作品も上演するべきである。

しかし、これら創作作品の上演のためには、かなりの時と知恵が必要で、今から長期的展望に立ち、計画を立てるべきであろう。

日本は明治の太政官の時代から、有形（産業）に対しては、その奨励と発展に力を尽くし、無形の文化芸術は、その後のいつの時代もなおざりにされてきた。

それは、明治以降の外国に追いつけ追い越せの殖産興業、富国強兵の思想に基づき、芸術の発展はその枠外にいた。本来文明と文化は車の車輪のようなものであると同時に、互いに共存しあいながら国民の将来のために発展させるべきであった。外の国を、そしてその国民を知るためには「まずその国の文化を学べ」と言われているが、しかし諸外国に対して、日本といえば、代表されるものは、ソニーであり、ホンダであって決して能楽でも日本舞踊でもなく、まして現代の舞台芸術においては、ごく一部の限られた社会にしか知られていない。ここで我が国の成すべき急務は、これら文化の育成と海外に対する存在の強調であると言えよう。一方、我が国の文化行政には少なからず偏ったところが見える。文化団体（法人）に対する経済的助成は行われているものの、文化庁在外研修員制度以外に、芸術家個人の育成はほとんど行われていないことが、まずそれである。古代、中国に文化を学ぶために派遣された公式の使節のように、私たち第一期生以降二二年間に約六〇〇名の芸術家たちが、個人の資格で現代の遣唐使として派遣されている。

久しく待望していた〔芸術文化振興基金〕が平成元年度の補正予算で通り、いよいよ今年度より施行されるため、種々その資金の使用方を研究中と聞く。

ここで私は、「可能な限りを是非組織団体に属さない個人の芸術家へ助成すべきである」と断言する。その助成こそが、今後の文化の発展に不可欠なものとなり、また、それは、新たなる視点からの芸術家育成への道も、必ず開かれていくと確信するからである。

●次号（9月号）目次

特集

新しい時代の教育委員会

●巻頭言
求められる「連携協力」体制――高倉　翔

●座談会
これからの教育委員会に期待されるもの
（出席者）石川忠雄／奥山　桂／上寺久雄／伊藤政子／（司会）小野元之

●論文
岐路に立つ教育委員会――松井一麿
生涯学習社会と教育委員会――牧　昌見
地域おこしと教育委員会――安彦文司

●教育長から一言
――全都道府県・政令指定都市教育長

人・この道――今井信子
わがまちの教育・文化――福井県宮崎村
ことばの小箱――野元菊雄
科学のひろば――宇宙科学研究所
ふるさとのうた――兵庫県教育委員会
郷土に生きる教育家群像――宮城県

編集後記

▽最近、芸術文化に対する国民の関心が強まってきています。これはほんとうの豊かさを物だけでなく、心で確認をしたいという証でしょうか。今月号は、「芸術文化の推進」というテーマで特集を組んでみました。

▽芸術文化の関心が強まる中で発足した、芸術文化振興基金のうち、一〇〇億円を超える額は企業からの寄付によるものです。この寄付に向けての関係者のご苦労は大変なものであると思いますが、芸術文化の振興という高い理想のもとに、企業の方々のご理解とご協力を得て、まず財政基盤を確立し、基金の運営を軌道に乗せていただきたいものです。

▽一方、忘れてはならないのは、この寄付金は、そこに働く関係者のご苦労とご努力の結果、生み出された大切な資金であることです。

▽また、芸術文化の振興方策は、これまでも数多く行われてきましたが、この基金の発足を契機に更に充実し、芸術文化の振興が一層図られることを、読者のみなさまとともに期待したいと思います。

▽この四月に希望と夢を胸にした新入生、新規採用の教職員のみなさまは、学校での生活も早いもので四か月を経過しました。

▽新しい生活環境での出会い、喜び、とまどい、苦しみなどいろいろなことがあったと思いますが、この夏休みにしっかり充電していただき、新学期を楽しく迎えていただきたいものです。（S・K）

投稿歓迎

『読者からのたより』欄への投稿を歓迎します。本誌を読んでのご感想、ご意見等をどしどしお寄せください。

●投稿規定
①一件につき四〇〇字以内　②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記（誌上匿名可）　③掲載分には薄謝進呈
※文章を一部手直しさせていただくことがあります。

●送り先
〒100 東京都千代田区霞が関三―二―二
文部省大臣官房政策課「文部時報」編集部

MESC　61　月刊　　文部時報　8月号　　第1363号

平成2年8月10日印刷
平成2年8月10日発行

●著作権所有――文部省©

●発行所――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号
（営業所）　〒162 東京都新宿区西五軒町4－2
電話　03－268－2141（代表）　振替口座　東京9－161番
●印刷所――株式会社行政学会印刷所

定価500円（本体485円）（〒61円）
年間購読料6,000円（〒共）

・ただし，増大号，臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお，購読のお申し込みは直接営業所またはもよりの書店にお願いします。

●本誌の掲載文のうち，意見にわたる部分については，それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 1990